

## はしがき

「本書の創刊は1987年である。その豊富なデータによって、中国ビジネスに関わる人々のバイブル的な存在となってきた。マクロ経済指標だけでなく、各省の多岐にわたるデータ、中国共産党の組織に関する情報が驚くほど詳細に載っている。」

以上は、本書の25周年版に対する『朝日新聞』2012年8月19日付の書評である。この過分なおほめに励まされて、中国ビジネスに関わる人々以外に、政治家、官僚、マスコミ、学者、学生、一般市民の皆様の座右にあって、本書がお役に立てるよう刻苦勉励している。

\*

本年は第13次5カ年計画（2016～2020年）のスタートの年である。中国政治・経済情報は氾濫し錯綜しているが、本書では向こう5年間のビジョンを基準にして取捨選択し評価づけしていくという方法を心掛けた。大綱を引けば網目は張る。まずトピックスとしての特集を4本用意した。

第1特集は「独裁者・習近平」。個人独裁色を強める習近平総書記に抵抗する勢力の存在をあからさまにした文書が登場した。来年の第19回党大会に向けてポスト争い、路線闘争が激しく展開されるのは必至である。

第2特集は「中国経済のパラダイム転換—『新常态』の衝撃」。もはや高成長を前提とした中国経済の分析枠組はほとんど意味を持たない。中国経済の観察に際しても、パラダイム（研究の基本的手法や問題意識）の転換が迫られている。

第3特集は「中国軍の大改革」である。陸軍支配の旧軍から中央軍事委員会主導の陸海空ロケット四軍統合の機動的新軍への大改革が長期的展望のもとにすすめられている。今回はその実態を中間報告した。

第4特集は「尖閣諸島接続水域への中国軍艦侵入」の真相である。原因と結果を逆立ちさせる情報操作、ダブル・スタンダードの「接続水域」論など、安倍政権の対応はいかにも危うい。

以上の特集の論旨をガイドとしながら、本書のデータの森に分け入っていただければ幸いである。その際、心すべきは「憎いあん畜生のことなど知りたくない」とばかり、不都合な真実を拒絶する自己中心主義に陥らぬことであろう。「孫子」にも言うではないか。己を知り敵を知らば百戦危うからず、と。

\*

本書は、今年で 29 版目になり、30 周年に王手をかけている。

矢吹晋、高橋博、大橋英夫、中村公省、そして稲垣清（香港在住）が創刊時の編集同人であった。編集顧問であった現代中国学の泰斗・故竹内実の創刊 25 周年への祝辞の一節を以下に引いて、時の熟するのを待ちたい。

「『蒼蒼』は空の色のことである。地上から見る空の色は“蒼い”、したがって天空から空を見おろしても空は“蒼い”だろうと莊子（そうし）はいつたのである。《中国情報ハンドブック》が創刊 30 周年、35 周年ととしをかさね、自祝他祝されることは疑いない。」

2016 年 6 月 30 日

蒼蒼社社主兼 21 世紀中国総研事務局長 中村公省